縄文時代晩期の中部日本における社会動態の可能性

Possible Social Dynamics in Central Japan in the Late Jomon Period

長田友也

OSADA Tomonari

❶縄文時代晩期における社会研究の動向
❷中部日本における縄文時代晩期社会研究史の概観
❸晩期中部日本の社会への近接に向けて
❹晩期中部日本における特産品
❺晩期中部日本における社会描出

［論文要旨］

近年の縄文時代研究では，様々な分野で縄文時代観の見直しが指摘されている。社会についても縄文時代の後半期において，一定程度の複雑化が指摘されることが多い。しかしそうした議論は関東以東の東日本で盛んな一方で，中部日本以西の地域ではあまり見られない傾向にある。それには社会複雑化を示す指標が必要であるが，本稿では中部日本にみられる特産品の流通・消費から，中部日本の社会動態と社会複雑化を検討した。

中部日本では，東海地方でみられるような小地域ごとの特産品の存在と，小地域間での流通・消費が指摘される。さらには，黒曜石や硬玉など列島各地へと広域に流通する優位な特産品が存在する。優位な特産品の存在は，現代的な経済観からすれば，流通・交易において社会的優位な状況を想定させる。大型磨製石斧や小型石棒類など，中部日本内で流通・消費される特産品については，その原産地と考えられる北陸・岐阜県飛騨地域などが流通を掌握し，独自の意義付けなどを行っていた状況もうかがえる。一方で，より遠隔地へともたらされる黒曜石や硬玉については，その消費・出土量は東北・関東地方に主体があり，中部日本の特産品であっても他地域主導により行われていた可能性が指摘される。

このように，晩期中部日本における特産品の流通・消費には複雑かつ多様な状況がみられ，その背景となる社会自体についても，一定程度の複雑化が想定される。しかし特産品の流通は，他地域による流通網・流通原理に組み込まれていた可能性が指摘され，流通網を掌握する東北・関東地方で描出されるような社会の複雑化が，中部日本では見えにくい可能性が考えられよう。あるいは中部日本の社会自体が，主体的に複雑化していく状況ではなく，受動的あるいは従属的に複雑な社会へと傾倒し，晩期中部日本の社会自体は複雑化と呼べるような段階に至っていない状況として評価した。
【キーワード】縄文時代晩期，中部日本，特産品，流通，社会複雑化

❶……縄文時代晩期における社会研究の動向

近年の縄文時代研究において，“縄文時代”という枠組みは揺らいだ状態であるといえよう。

枠組みの１つである時間幅については，放射性炭素年代測定法の技術進展により，相対年代としての時間軸である縄文土器型式に対し，暦年較正された絶対年代が提示されつつある。これは，縄文時代の前後の時代となる旧石器時代および弥生時代との境界の見直しに端を発し，ひいては縄文時代自体の時間幅，さらには時代区分の問題へと波及し議論が交わされている［谷口 2011，小林･工藤編 2011，工藤 2012，石黒編 2011 など］。

枠組みに対する注視は，空間的領域についても同様であり，縄文時代における日本列島周辺地域との文化的接触と，縄文時代にみられる土器をはじめとする諸文化属性自体の交流についても議論がなされている［水ノ江・西脇編 2013 など］。列島内部においても，縄文時代の文化総体としての“縄文文化”の設定，あるいは“縄文時代”というそもそもの枠組み自体ついても議論がなされている［山田 2015 など］。これらは“縄文時代”の名の下に，一様かつ一貫性の中で語られることの多かった縄文時代観の見直しと，関西・中四国・九州といった西日本各地の縄文時代研究会をはじめとする，列島各地・諸地域の縄文時代地域研究が進展し，縄文時代における多様な地域文化が明示されてきた１つの方向性であると言えよう。

こうした”縄文時代の枠組み”に対する揺らぎは，枠組みとした時間的･空間的範囲だけでなく，縄文時代の社会観に対しても同様である。渡辺仁による『縄文式階層化社会』［渡辺 1990］の提示後，1990 年代から 2000 年代にかけては，縄文時代の特に後半期（中期以降）における社会の階層化について種々議論されてきた［林 1995，中村 1999，高橋 2001 ほか］。近年こうした階層化の議論は沈静化する傾向にある一方で，縄文時代の社会に対して旧来の平等社会としての評価から「階層化過程にある社会」［高橋 2014］との指摘に代表されるように，特に縄文時代の後半期にはその社会が一定程度“複雑化”していたとする意見が頻繁にみられる傾向にある。

縄文社会の複雑化の内容・評価については，高橋龍三郎による一連の研究が端的であろう［高橋 2001・2014 など］。高橋によれば「複雑化」とは，等質的平等社会から階層的不平等社会へと移行する際にみられる，社会の統合や社会の序列化などの社会組織の変化自体を総じて「複雑化」と称している。具体的には，階層化過程にある縄文時代後半期社会にみられる，地域統合や親族組織の変化，儀礼空間と儀器の関係，儀器・儀礼行為の高度化などが指標として挙げられている。したがって，かつて種々議論が行われた社会の序列化や階層化という不平等社会像を提示するのではなく，あくまで平等社会からの緩やかな移行段階としての幅を持たせた社会変化を指し示す用語として，「単純」ではなく「複雑」であるというような，やや幅を持たせた抽象的な表現として「複雑化」という用語が多用されてきたのであろう。

しかし，この社会の複雑化に関する議論には温度差があり，議論の対象となる地域は関東地方以東の東日本地域においてである。一方の西日本地域では，縄文時代の社会に関する議論自体が低調であり，社会の複雑化に関する議論に至ってはほとんどみられない。その背景としては，集団単位を明示する根拠が乏しい点があげられ，東海地方以西では竪穴住居に代表される居住痕跡の出土数

が限定的であり，集団単位の復元が困難となっている。その一方で，東海地方や瀬戸内地方の貝塚地帯では，戦前より大量の埋葬人骨が出土することが知られており，これらを基にした社会集団の検討［春成 1973 など］は縄文時代社会論の指針とされ，埋葬人骨が群をなす埋葬小群に対しては何らかの血縁集団のまとまりとしてとらえられる傾向にある［山田 2008a など］。しかし，抜歯型式など集団単位の基準に対する議論や，埋葬小群の群別方法などについては共通理解が得られず，さらには埋葬人骨自体の年代差に関する指摘［日下・米田・山田 2015，山田・日下・米田 2016］もあり，埋葬人骨による集団単位の抽出にはより慎重な検討が求められる状況にある。

こうした研究現状をふまえ，本稿では縄文時代における日本列島の多様な文化の一地域であり，東西日本の間にあたる中部日本を取り上げ，東日本において社会が複雑化したとされる縄文時代晩期を中心に，晩期中部日本において社会が複雑化したか否かを検討するものである。

❷……中部日本における縄文時代晩期社会研究史の概観

日本列島の一地域である中部日本とは，その名のごとく日本列島における中央部に位置し，日本の地方区分である「中部地方」にほぼ該当する。中部地方とは，東海地方（愛知県・岐阜県・静岡県）・甲信越地方（山梨県・長野県・新潟県）・北陸地方（福井県・石川県・富山県）の 9 県からなる。さらに，これに三重県を東海地方に含めた 10 県を対象とすることもあり，本稿においてはこの 10 県を検討の対象とした。

これら中部日本とした範囲における晩期社会研究については，積極的にこれのみを扱うものはほとんどみられないが，各地域の概況については，概説書などで触れられている。縄文時代における日本列島の地域性について初めて言及した概説書である『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』［鎌木編 1965］では，日本列島を 11 の地域に分けて概説がなされ，中部日本に該当するのは，「4 北陸」［高堀 1965］，「5 中部」［永峯 1965］，「6 東海」［市原・大参 1965］である。これらは土器編年研究を中心とした記載であることもあり，晩期前半期における亀ヶ岡文化の外郭的な位置づけと，後半期における条痕文土器に代表される西日本的様相の拡大という概観で共通しており，またそうした境界地域であるという地理的条件からも，日本列島における東西文化の交流点としての評価がみられる。こうした視点は，現在にお

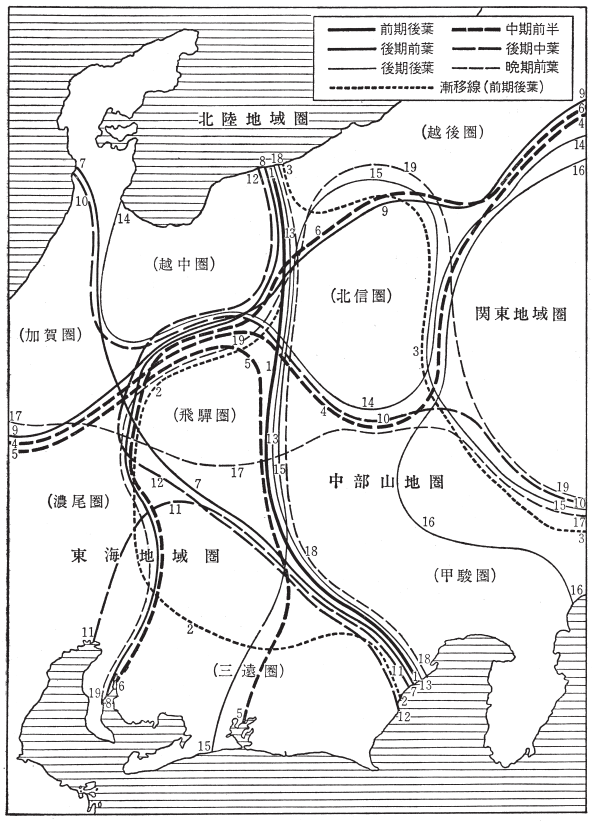


図1　中部日本の地域圏（向坂1970より転載）

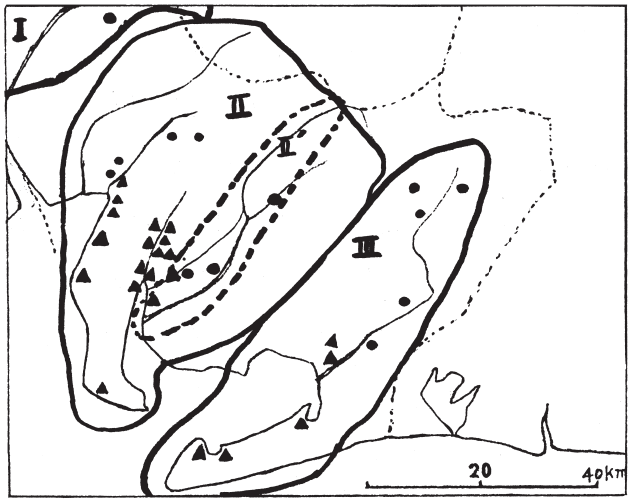


図2　愛知県を中心とする晩期前半型式分布（増子1975より転載）
Ⅰ：又木式，Ⅱ：本刈谷式（Ⅱ'：桜井式），Ⅲ：保美Ⅱ式

いても継続している見方であろう［伊藤2013など］。

こうした研究と前後して向坂鋼二は，東海地方を中心にその土器型式分布に着目し，後期から晩期にかけての分布を図示した［向坂1958］。その後，集団領域の提示を意図して，遺跡群研究を行うとともに，中部日本の範囲に土器型式分布を基にした複数の地域圏（図1）を設定した［向坂1970］。その提示は，中部日本を北陸地域圏・中部山地圏・東海地域圏の3つに大別するとともに，各地域圏の内部に包括される旧国単位に近い細別地域も設定している。向坂による地域圏の提示は，その後の中部日本における地域研究の指針となり大きな影響を与えた。特に，詳細な分析がなされていた東海地方については，増子康眞により更なる土器細別型式の提示と，土器型式分布圏が図示されている［増子1975，図2］。

また1960年代には，愛知県を中心とした東海地方の貝塚から出土する埋葬人骨を基に，遺跡内の集団復元とその社会構造に対する言及がみられるようになる。こうした傾向は，春成秀爾による抜歯型式を基にした社会復元［春成1973］を端緒に，様々な形で社会論が展開している［田中1998，舟橋2003など］。

近年の動向においても，愛知県を中心とする東海地方での検討が目立つ。2008年には愛知県で日本考古学協会大会が開催され，「縄文時代晩期の貝塚と社会」と題したシンポジウムが行われ，貝塚における生業論と墓制論を中心に晩期社会について議論された。生業論では，岩瀬彰利が自論［岩瀬2003］を踏まえた上で，渥美半島にみられる「居住地型貝塚」と，三河湾奥東にみられる「加工場型貝塚」など，自然環境の違いから採貝活動などにおいて小地域ごとの特色が存在し，それらを元にした交流・交易を含めた地域社会について指摘した［岩瀬2008］。墓制論では山田康弘が，埋葬人骨から導き出された集団単位（埋葬小群）の存在を指摘し，「性別・年齢別集団を構成し」，「外婚制を採り，双系的ないしは選系的な社会を営んでいた」［山田2008b］ものと推測した。しかし，具体的な集団構成，社会集団と，それを遺跡のどの部分として読み取るのかなどについては，いまだ不明な部分が多いとの確認もなされた［長田2008］。こうした状況は，5年後に開催された「東海地方における縄文時代晩期前半の社会」と題したシンポジウムにおいても，大きな変更はみられなかった［東海縄文研究会2013］。

このほかでは，先の各シンポジウム発表者でもある川添和暁が，晩期東海地方の遺跡を単位として，生業論を基盤に地理的空間・遺跡形成などを踏まえ，遺跡群における遺跡間関係から社会の描出を試みている［川添2011］。川添によれば，晩期前葉を中心とする東海地方では，小地域別に集団の同一帰属性が存在し，小地域内に遺構・遺物の多くみられる「複合的遺跡」が複数存在する場合は，生業および製作・使用・埋納・廃棄などの諸活動において，役割分担を行っていた可能性を

指摘している。さらに小地域を超えた複合的遺跡間の関係については，各小地域が独自性を保ちつつ，かつ複雑な相互関係により絡み合い，より大きな地域集合体を形成しているものと想定している。筆者も先の土器型式分布にみられる小地域圏に着目し，小地域内部の遺跡間関係を基に晩期東海の社会について検討した［長田 2011b］。これについては，次節において詳述する。

東海地方以外の中部日本では，晩期社会論に関する議論は総じて活発ではない。そうした中で，山本直人は北陸地方中央部の石川県手取川扇状地の遺跡を検討対象とし，その社会像として部族社会・年齢階梯社会であったと推定している［山本 2013］。また近畿地方を対象とするものであるが，高橋龍三郎は奈良県橿原遺跡や滋賀県滋賀里遺跡における多様かつ多くの儀器の存在から，祖先祭祀などの儀礼行為の高揚を指標とした社会の複雑化を指摘している［高橋 2014］。

❸……晩期中部日本の社会への近接に向けて

晩期中部日本において，その社会復元に向けた取り組みは一定程度なされ，特に東海地方の埋葬人骨に関する研究［春成 1973･2002，山田 2008a･b など］は，これまでの縄文時代社会論の一翼を担ってきたと言っても過言ではなかろう。その一方で冒頭で触れたように，竪穴住居をはじめとする居住単位や，埋葬人骨の帰属時期の問題など，遺跡内の集団単位を明確に示す根拠が乏しく，埋葬人骨研究による具体的な集団像・集団構成を考古学的に検証する材料を得るに至っていない。こうした状況を受けてか，近年の縄文時代社会研究で議論される“階層化”や“複雑化”についても，東海地方以西では積極的に言及されない現状は先にも述べた通りである。

晩期中部日本のように遺跡内の集団単位を明示できない状況下において，先に触れた複雑化の指標［高橋 2014］の中で注目されるのが，社会組織化の象徴として取り上げられることの多い儀器の問題である。晩期中部日本では，晩期になると土偶・土版などの土製品，小型石棒類・石冠などの石製品といった儀器が増加する傾向にある。特に，より西部に位置する東海地方では，晩期は縄文時代の中で最も儀器の種類と数量が増加する段階であり，この点のみを評価すれば，儀器の多様化・増加に象徴される社会組織化の進展ととらえられ，社会が複雑化した状況とも考えられよう。しかし，社会組織化の指標となる儀器の機能は，祖先崇拝や狩猟儀礼などの具体的な儀器の性格が意図され，初めて指標となりえるものであると考える。残念ながら，現状の縄文時代儀器研究では，晩期儀器の具体的性格・機能についてまでは言及することができず，儀器を用いたどういった部分の儀礼行為が高揚したのかの明示が困難であろう。

そこで筆者が指標としたのが，遺跡を単位とした集団単位の社会描出であり，特産品に代表される流通についてである。こうした視点により，先に東海地方を中心に提示された細別土器型式分布圏［増子 1975，図 2］と，その内部における各遺跡を単位とした流通を基にした社会の描出を試みた［長田 2011b］。具体的な分析手法としては，先に提示された土器型式分布のまとまりは，それ以外の文化事象においても，小地域内では土器型式と類似した傾向を示し，土器型式圏とされる文化的なまとまりについて一定程度の有意性を確認した。その上で，“特産品”（地域資源）に代表されるように，小地域ごとの特徴を抽出し，特産品の移動・移入から小地域間での関係性が存在するとみなした（図 3 左）。さらに，各小地域内において，遺跡ごとの特産品を含めた遺物･遺構の出土数量お

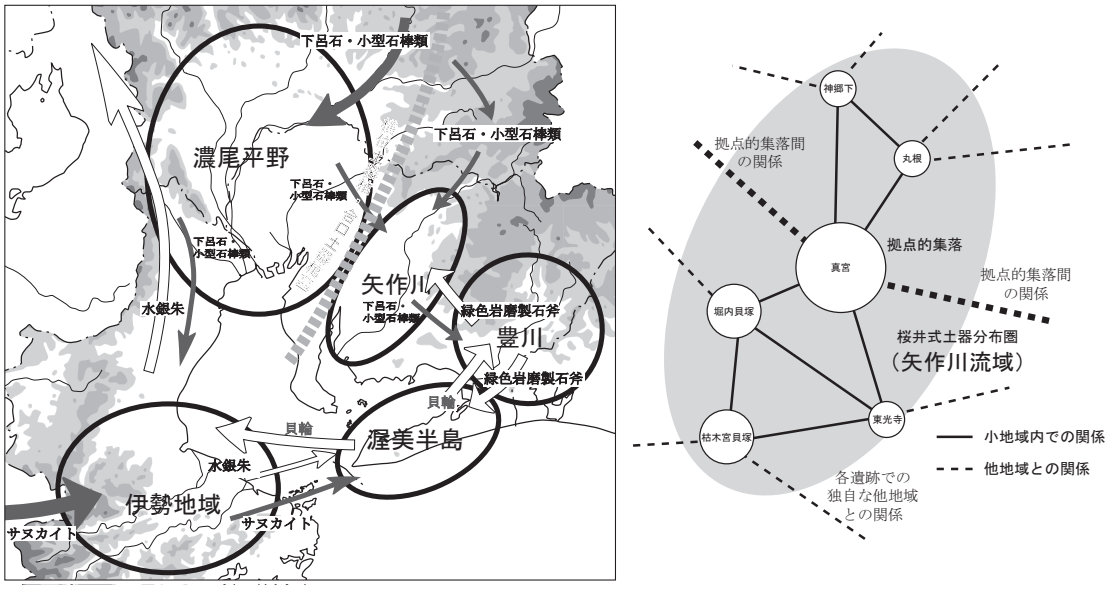


図3　東海地方における後期後半から晩期における東海地方の地域間関係（左）と小地域内の遺跡間関係モデル（右）（長田2011より転載のうえ一部加筆）

よび質を比較し，量・質ともに他の遺跡を凌駕する拠点的な遺跡が，小地域ごとにほぼ一遺跡ずつみられることを示した。加えてこの拠点的な遺跡では，先の特産品に代表される小地域内では産出しない素材の入手などにおいて，寡占的に交換・交渉を行っている可能性を確認できた。その一方で，特定の文化事象については，拠点的な遺跡に関係なく個々の遺跡で交換・交渉を行っている状況もうかがうことができた。すなわち，拠点的な遺跡が交換・交渉などのあらゆる中核を担うのではなく，個別的・複合的で自由度の高い遺跡間関係が構築されていたことを想定した（図3右）。

こうした状況下で考えられる晩期東海の社会は，小地域のみ，あるいは隣接する小地域間程度で完結する集団構成で成り立つ可能性もあれば，従来指摘されているような双分制社会さらには四分制社会など特定の親族集団による構成で成り立つ可能性も考えられる。しかし，恒常的にもたらされる遠隔地石材の存在に代表されるように，より離れた地域ともモノの交換を行い，さらにはそうした関係の維持を重要視するような傾向すらみられる集団にとっては，婚姻関係を含めその社会制度はより複雑になる可能性も想定されよう。

上記の作業を通じて，遺跡間あるいは小地域間における関係性の検討が，当時の社会を一定程度評価可能であると考えられよう。特に，具体的な考古資料として提示される特産品と称した小地域それぞれを特徴づける素材・製品のうち，特定産出地が判断しやすい石器および石材などは，それらの時空間分布をたどることで，産出地（遺跡～小地域）と消費地（遺跡～小地域）の関係を示すことが可能である。こうした作業を繰り返すことで，石器・石材の流通・交換・交渉だけでなく，他の特産品との流通・交換・交渉を含めた経済的関係性を示すことができ，さらには婚姻などによる血縁関係，集団紐帯の強化など，小地域間における有機的なつながりを示すことも可能であろう。

そこで本稿では，東海地方で一定程度成果の得られた手法を用い，これを中部日本に拡大して検討するとともに，さらなる遠隔地域をも視野に入れた列島規模での関係性を描出する。これにより，中部日本を中心とした遺跡間関係・地域間関係を提示し，それらを集団間の関係性へと昇華させた上で，その背景となる社会において複雑化過程が読み取れるか否かを検討する。

❹……晩期中部日本における特産品（地域資源）

中部日本は，列島規模でみても有用な特産品が豊富な地域として評価されよう。具体的には，甲信地方および東海地方東部に産出する黒曜石，北陸地方にみられる硬玉，新潟県北部にみられる珪質頁岩やアスファルト，飛騨地方の下呂石，伊勢地方の水銀朱など，特有の地質環境に伴う天然資源があげられる。さらには，東海地方西部や北陸地方西部の貝塚地帯にみられる骨角貝器や海産物なども，特産品に含まれるであろう。これらは中部日本全体に広く用いられるだけでなく，黒曜石や硬玉のように隣接する関東地方へ，さらにはより離れた地方へもたらされることが知られており，縄文時代の交易研究の代表として認知されている［栗島 2007 など］。

ここではこれらの地域資源のうち，原産地が明瞭であり，かつ流通実態が把握しやすい石器・石製品を中心に，広域にあるいは狭域に移動する特産品として検討を行う[(1)]。

1）磨製石斧

磨製石斧は，その出現時期・出土量などにおいて縄文時代を代表する磨製石器であり，剥離・敲打・研磨といった製作技術を複合的に用いて製作される，複合技術系列［大工原 1996］を代表する石器である。一方で，製作に大変な時間と労力を要するため，縄文時代早期中葉以降に磨製石斧の需要が高まるにつれ，それらを集中的に製作し供給する磨製石斧製作遺跡が登場するようになる［長田 2012a］。縄文時代中期以降には，磨製石斧製作遺跡の存在は一般的となり，磨製石斧は適した石材資源を有する地域の特産品となっていく[(2)]。晩期中部日本において用いられる磨製石斧は，大きく定角式磨製石斧と乳棒状磨製石斧に二分されるが，製作遺跡を取り巻く磨製石斧の在り方には大きな差はみられない。

定角式磨製石斧は，新潟県西部の中央構造線付近に産出するいわゆる“蛇紋岩”[(3)]を用いて全面を丁寧に研磨仕上げして製作され，斧柄は膝柄を用いるものと考えられる。晩期には新潟県寺地遺跡［寺村編 1987］や富山県境Ａ遺跡［山本ほか 1990，山本 1991］など大規模な製作遺跡がみられる。こうした地域で製作された蛇紋岩製定角式磨製石斧は，縄文時代中期以降に中部日本各地から出土することが知られている［関西縄文文化研究会編 2004 など］。その一方で，中期後半以降になると定角式磨製石斧のうち，伐採斧と考えられる大型品[(4)]が各地で製作されるようになる［長田 2012a］。中部日本においても，後期前半以降に新潟県北部［高橋 1999，滝沢編 2002］や石川県能登地方［砂上編 2014］，福井県若狭地方[(5)]，東海地方西部［長田 2005］などで，主に在地系火成岩を用いた定角式磨製石斧の製作が行われるようになる（図 4）。このほかにも，明確な石材産地・磨製石斧製作遺跡が判明しない石材・形態の定角式磨製石斧の存在も指摘されており［土谷 2007・2013］，未だ明らかではない定角式磨製石斧製作とその流通の実態が存在する可能性も十分に考えられる。

乳棒状磨製石斧は遠州式磨製石斧とも呼称されるように，東海地方から関東地方南部にみられ，特に東海地方では後期後半以降に乳棒状磨製石斧が一般化する。乳棒状磨製石斧は，静岡県西部から愛知県東部，紀伊半島中央部を走る中央構造線に伴う御荷鉾帯に産する，緑色岩と総称される変成岩や，養老山地から鈴鹿山系に産出するハイアロクラスタイトなど硬質の石材を用い，刃部のみを

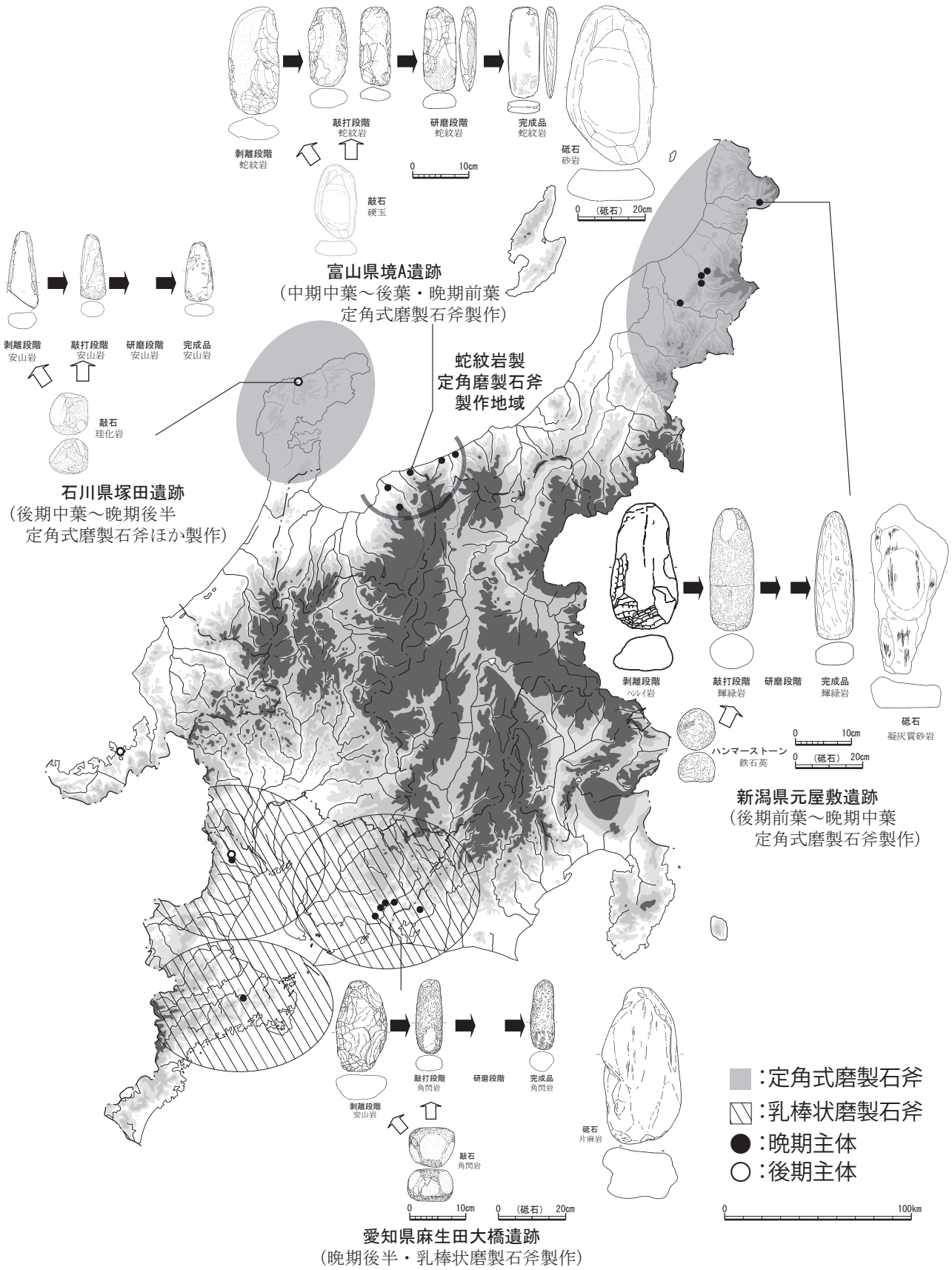


図4　晩期中部日本における主要な磨製石斧製作遺跡と製作された磨製石斧の展開
（蛇紋岩製磨製石斧はほぼ全域に展開，遺物実測図は各報告書より転載）

研磨仕上げし，斧柄も直柄を用いるものと考えられる。製作遺跡は，静岡県西部の浜名湖周辺［佐藤 1996］・愛知県東部の豊川流域［安井・石黒ほか 1991，前田・小島ほか 1993］，三重県北部地域［竹内ほか 1999］，三重県南部の伊勢地域［奥ほか 2011］に乳棒状磨製石斧の製作遺跡がみられる。これら製作遺跡の分布は，先にあげた東海地方における小地域圏ないしはその隣接地域への展開にほぼ限られ，より広域に展開する状況はほとんどみられない（図 4）。製作された乳棒状磨製石斧は基本的に伐採斧と考えられ，乳棒状磨製石斧の盛行期である晩期東海地方においても小型の加工斧については一定量の蛇紋岩製定角式磨製石斧が広くみられる。

したがって晩期中部日本においては，その全域に展開する蛇紋岩製の定角式磨製石斧と，在地系石材を用いた定角式磨製石斧・乳棒状石斧が存在する。前者は加工斧にあたる小型の定角式磨製石斧を主とし，その展開は中部日本一円に，さらには隣接地域へと展開するのに対し，後者は磨製石斧の形状も斧柄の形状も異なるが伐採斧である。その展開は，石材産地周辺の製作遺跡から小地域圏や隣接地域など，半径 50 ～ 100km 程度の範囲にのみ展開するものと考えられる。蛇紋岩製磨製石斧の広域展開は，これらが他地域の磨製石斧石材に比して良質であり，あるいは付属品としての斧柄とのセットとして広く受容されていたことを示していよう[(6)]。しかし，縄文時代中期までは伐採斧である大型の蛇紋岩製定角式磨製石斧までもが比較的広域に展開していたのに対し，晩期になるとそれらは在地系の磨製石斧にその座を奪われていく［長田 2012a］。重量のある大型の伐採斧を遠隔地へともたらす労力よりも，地域特有の石材を用いた伐採斧を用意した方が費用対効果が高かったことなどによるものと考えられようか。いずれにしても晩期中部日本においては蛇紋岩製磨製石斧の受容が一定程度あったものの，より製作労力のかかる大型の伐採斧は代替品によって需要が減少した状況がうかがえ，特産品としての蛇紋岩製磨製石斧の価値は中期などより低下した状況が考えられる。

以上のような磨製石斧の製作と流通をまとめると，伐採斧にあたる大型の磨製石斧は各地域で製作され，製作遺跡を内包する小地域内に展開しており，その範囲は小規模な展開をみせる細別土器型式の範囲と類似する傾向にあり［長田 2011b］，土器同様に地域圏を理解する一助となろう。すなわち大型石斧の製作・流通は，内在的な需要に支えられた製作単位であり，小地域内のみにおいて有意性をもつ特産品であったと考えられる。

先にあげた晩期東海を例にあげれば，小地域における大型磨製石斧（伐採斧）の流通は，愛知県麻生田大橋遺跡のように磨製石斧製作を統括するような拠点的遺跡が担っているものと考えられ，さらに隣接する小地域との流通においても，同県真宮遺跡でみられたように拠点的遺跡が集積される状況が指摘できる（図 4）。したがって，隣接する小地域間程度の交渉であっても，拠点的な遺跡の存在が重要視され，単純な互酬連鎖による流通ではなく，拠点的な遺跡を介在した小地域内での流通が想定される。こうした流通実態をもって，その背後にある社会関係の複雑化と捉えることも可能であろうが，ここでは隣接する小地域間におよぶ小規模な流通の実態としておきたい。

これに対し蛇紋岩製磨製石斧は，小型品を中心としながらもより広域に展開しており，産地・製作地においても重要な特産品であったと観られるが，現状ではその流通の実態は不明瞭な点が多く評価は難しい。また，大型磨製石斧を含め広域に流通していた中期以前の状況とは一線を画するものであり，異なった状況を想定しておく必要があろう。

2）玉（縄文勾玉・丸玉）～硬玉産地からの展開

先にあげた蛇紋岩製磨製石斧を製作する地域には，より重要な特産品として硬玉（ヒスイ）をはじめとする貴石を用いた玉が存在する。硬玉製品の広域流通は，中期に盛行する硬玉製大珠を中心に研究が進んでおり，硬玉製大珠を基にした社会論も盛んに提示されている［栗島 2007 など］。

晩期においても硬玉や硬玉産地で採取される軟玉・透閃石岩・ロディン岩といった貴石を用いた玉が製作され［木島 1995］，中部日本の各地へ［伊藤 2005，伊藤・谷口 2006，田村 2006 など］，さらには列島各地へともたらされている［藤原 2006 など］。こうした状況を踏まえ，筆者はかつて硬玉産地である新潟県域を中心に，これら硬玉製玉の展開を検討したことがある［長田 2008］。本稿においてもこれを基本に，さらに中部日本全体に視野を広げて概観してみたい。

硬玉産地である新潟県西端に位置する糸魚川市周辺では，晩期においても玉製作遺跡が確認され，新潟県寺地遺跡［寺村編 1987］や同細池遺跡［寺村ほか 1974］，富山県境Ａ遺跡［山本ほか 1990］などが知られている。これらは「基本生産圏」［木島 1995］と呼ばれ，海浜あるいは河床での転礫採集により素材を得て，粗割→敲打→穿孔→研磨という工程を経た玉製作が行われている。硬玉産地という石材環境を積極的に利用した，基本的な玉製作である。しかし，基本生産圏の遺跡では，墓壙から玉が出土した例は確認されておらず，また圧倒的な玉未製品の量に比して完成品はごく少量である。したがって基本生産圏では，玉を製作するのみで，玉を使用（副葬あるいは着葬）することは少なかった可能性が指摘できよう。

さらに晩期における玉製作では，硬玉産地から離れた周辺地域においても一定程度の玉製作が行われており，これらは「波及生産圏」［木島前掲］とされている（図 5）。波及生産圏は，硬玉産地である糸魚川市周辺の約 70km 東にあたる高田平野以東の新潟県内，および南側の長野県中信地域の一津遺跡［篠崎ほか 1990］や円光房遺跡［森嶋編 1990］，さらには西側の富山県西部から金沢平野の御経塚遺跡［高堀編 1983］にまで広がっている。特に硬玉産地の東部に位置する新潟県内では，隣接する高田平野だけでなく，中越地方・信濃川流域の藤橋遺跡［小林 2009］や阿賀野川以北にある村尻遺跡［関ほか 1982］，中野遺跡［田中ほか 2014］などでも玉製作を行っている。これらの中には籠峰遺跡［小池ほか 2000］や小丸山遺跡［親跡 1991］など，配石墓や墓壙を伴う遺跡もみられるものの，埋葬遺構から玉が出土することはなく，基本生産圏同様に玉を製作する一方で玉を使用した形跡が乏しい点において共通している。

この「基本生産圏」・「波及生産圏」の周辺地域での玉の出土状況としては，南・西側にあたる地域では，玉が数点のみ出土する遺跡が多く，産地・生産圏から離れるに従い逓減傾向にある。そうした中にも山梨県金生遺跡［新津編 1989］のように 10 点もの玉が出土し，硬玉を多用した細かな装飾の入った勾玉が出土する遺跡もあり，単純な逓減モデルでは説明できない点も確認されよう。この金生遺跡では，蛇紋岩を三角形に研磨した製品（未穿孔）も出土しており，硬玉産地との密接な関係を思わせる点も注目されよう[(7)]。一方で，硬玉産地・基本生産圏から離れるに従い増加するのが土製玉類である。日本海側の硬玉産地・生産圏の対極にあたる東海地方では，玉のすべてが土製である愛知県神郷下遺跡［田端 1975］をはじめ土製玉類が出土する遺跡が多く［川添 2015］，貴石製玉類の代替品として土製玉類が用いられた可能性も考えられよう。しかしここでも，より遠隔地にあ

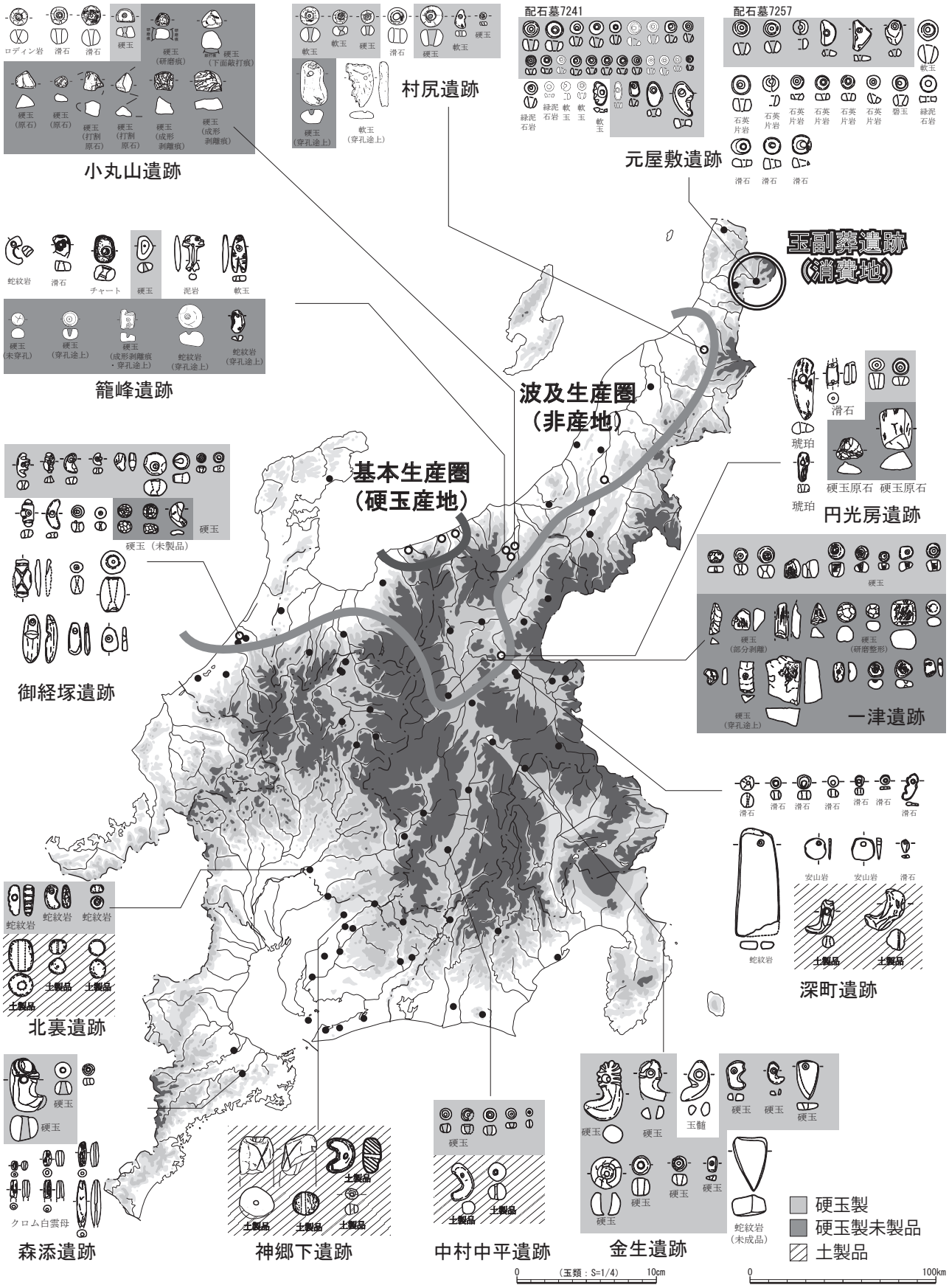


図5　晩期前半の中部日本における主要な玉類の展開(各報告書より転載)

たる三重県森添遺跡［奥ほか2011］から硬玉製勾玉の優品が出土しており，距離による単純な逓減傾向ではなく，より複雑な玉の流通・受容構造が想定される。

さて，硬玉産地・生産圏の南・西に当たる地域の状況と比して，生産圏の東側にあたる新潟県北端部では，全く異なる玉の出土状況がみられる。それは新潟県北端に位置する元屋敷遺跡［滝沢編2002］でみられる，複数の玉が墓壙内より出土するという，明確な玉の消費の状況である。

元屋敷遺跡では配石墓・配石土壙が99基，土坑墓65基，埋設土器206基と多くの埋葬施設が出土している。玉は全体で293点出土しており，硬玉製が141点（48.1％）と半数を占め，次いで石英片岩38点，滑石32点，緑泥石岩26点などが玉素材に用いられている。293点の玉のうち，204点（69.6％）が配石墓（13基）・土坑墓（1基）といった埋葬施設から出土しており，玉を使用（着装）した遺跡として評価されよう。墓壙内出土の玉204点は土坑内埋土の水洗選別による40点を除き，164点が墓壙底面より5～10cm程度上の位置からまとまって出土しており，遺体に着装していた可能性が高い。墓壙からは複数の玉が出土する事例が14例中11例あり，玉擦れ［長沼・畑1998］の存在からも組み合せて用いる「連珠」であったことが読み取れよう。

実際の出土状況として配石墓7241を例として挙げよう。配石墓7241からは30点もの玉が出土しており，これらのうち25点が土壙中央底面近くに，大きく2つのまとまりとなって出土している（図6）。東側のまとまりの中央には硬玉製勾玉（1215）があり，その脇に硬玉製（1210・1213）と軟玉製（1211）の不定形玉が，さらにこれを囲む4点の丸玉により連珠が構成されている。

これらのことから元屋敷遺跡は，新潟県内の多くの地域でみられた玉製作に関連する遺跡ではなく，玉を副葬し積極的に消費した遺跡であると評価されよう。したがって元屋敷遺跡は，新潟県内における原産地・生産圏と玉の使用・副葬を行う境界に位置する遺跡として評価できよう。

元屋敷遺跡でみられた玉の使用状況，特に埋葬施設に連珠として副葬（着装）する事例は，東北

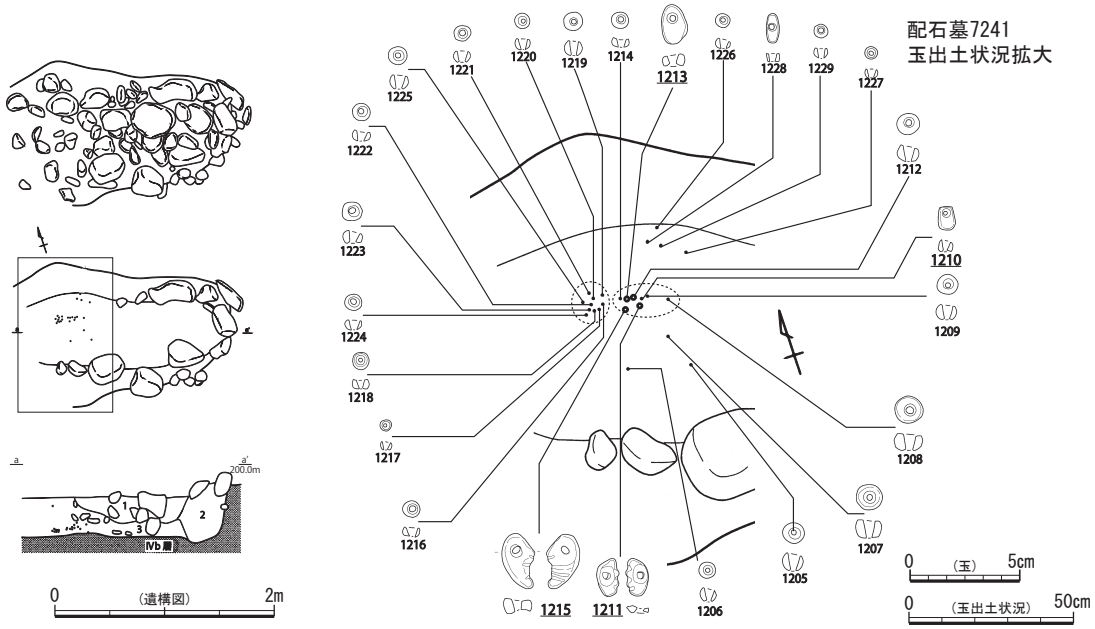


図6　玉副葬遺跡（消費地）における玉出土状況・新潟県元屋敷遺跡・配石墓7241
（滝沢編2002より転載，遺物番号は報告書番号に対応）

地方から北海道南部に多いことが知られており，特に青森県を中心とする東北北部に多くみられる。出土点数においても青森県が出土量・遺跡数，さらには質にあたる硬玉製玉の数量のいずれも最も多い[8]。次いで秋田県・山形県と続き，太平洋側の岩手県では出土数そのものが少ない上に，墓壙内出土も１点のみである例が大半であり，複数出土する場合でも数個程度のみである。また津軽海峡を渡った北海道南部においても玉の出土が顕著であるが，やや時期が古く後期後半にその盛期がみられるようである［藤原 2006］。東北地方北部を中心に大量の玉が墓壙から出土する状況は，明らかに原産地・生産圏からの逓減傾向とは異質の状況であり，原産地から新潟県内の北側へと波及生産圏が拡大していく状況を含め，玉の一大消費地は原産地及び波及生産圏ではなく，東北地方北部を中心とする地域と考えられよう。

また元屋敷遺跡と東北北部の中間に位置する東北地方南部では，元屋敷遺跡から朝日連峰を隔てた山形県砂川Ａ遺跡［佐藤ほか 1984］で 10 点の玉が出土するなど，玉の出土数は概して少ない。そうした中，庄内平野の東南端に位置する山形県玉川遺跡は，県指定文化財の 149 点を含めこれまでに数百点もの玉が出土しており，埋設土器中からも磨製石斧と硬玉製勾玉がセットで出土するなど，玉を副葬している状況がうかがえる［小林 2005］。その一方で，太平洋側の宮城県や福島県では玉の出土は低調である[9]。このように複数の玉を副葬する遺跡の分布をみていくと，硬玉産地から新潟県北部の波及生産圏を経て，元屋敷遺跡から玉川遺跡というように日本海側に一定の距離を保ちながら点々と玉を複数出土する遺跡がみられる（図7）。まさに硬玉産地から，大消費地である東北北部へと続く流通経路を指し示しているかのようである［長田 2008］。したがって，これら玉を大量

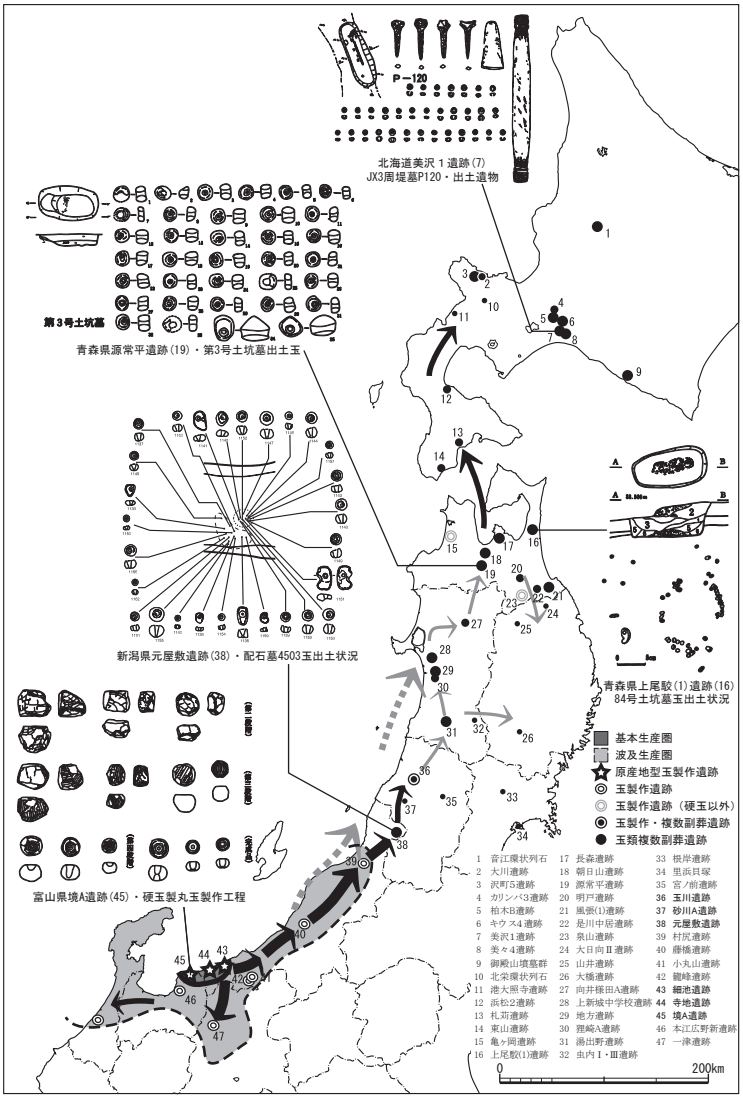


図7　晩期中部日本北半から東北地方にかけての玉の展開
（長田2008に加筆修正の上転載）

に副葬する遺跡の南端に位置し，波及生産圏と近接する元屋敷遺跡は，東北地方北部にもたらされる玉に深く関わっていた遺跡・集団であった可能性が十分に考えられよう。

以上のような玉の製作と流通の状況，さらには東北北部において大量に玉を用いる状況からは，玉が列島内で需要のある優れた特産品であったことを示していよう。このことは硬玉産地周辺だけでなく，約200kmも離れた新潟県北部にまで素材を運び，広範囲で波及的に玉製作を行う状況からも明らかであろう。その一方で中部日本においては，墓から玉が出土する例がほとんど見られない。長野県中村中平遺跡［馬場2011］では墓壙と考えられる土坑から玉が3点出土しているが，連珠としての使用とは言い難く，玉を用いて装身する原理・習俗に乏しかったのであろうか。

これらのことから，玉を用い装身する原理・習俗を有していた東北北部の人々が，目的とする玉の素材・形状や数量などを設定するなど，玉の製作や流通においても主体的な役割を担っていた可能性も大いに考えられよう。すなわち，特産品としての玉の製作や流通における原理・原則の多くを東北北部の人々が握っており，これに追従するように新潟県内の硬玉産地・生産圏が存在したのではなかろうか。こうした状況は，玉の流通において複雑な交換・交渉の存在が想定され，その背後に存在する社会自体に対しても複雑な様相が想起される。しかし，その原理・原則を消費地側である東北地方北部の集団が担い，原産地側である中部日本側が従属するような状況からは，中部日本に視点を移せば積極的な複雑化とは言い難く，他力的な複雑化の方向性といえよう。同様に，硬玉産地以外の中部日本においても，玉を着装することもあったのであろうが，玉の出土量からすれば圧倒的に少なく，ましてや連珠としての使用や墓への副葬がみられない点からは，玉の断片的な情報のみを認識していた程度の可能性もあろう。粗雑な土製玉を用いたり，あるいは縄文勾玉の優品のみを保有したりする遺跡の存在も，こうした状況を物語っていよう。

一方で，三重県森添遺跡でみられたように，九州産と考えられる玉が中部日本にまでもたらされているとの指摘［大坪2015］もあり，玉の装身や保有においては，列島の広範な地域を対象としたより複雑な流通・消費の状況が想定されており，その背景となる社会自体が複雑化している状況を反映している可能性も考えられよう。

3）小型石棒類（小型石棒・石剣・石刀）

縄文時代晩期を代表する儀器である小型石棒類[10]は，石材と形態との関係が極めて顕著であり［長田2012b］，前段階の後期後半に登場する成興野型石棒［後藤1986・87］がその典型としてよく知られている。成興野型石棒は，東北地方の北上山地に産出する粘板岩（スレート）を用いて作られており，製作遺跡も複数知られている［熊谷2013］。晩期初頭には成興野型石棒と同じ石材を用いた熊登型石剣［後藤前掲］が登場し，中部日本においても北端にあたる新潟県元屋敷遺跡などで散見される（図8）。晩期前葉・大洞BC式期になり熊登型石剣が姿を消すと，東北産の小型石棒類は関東や中部日本では用いられなくなり，代わって地域ごとに独自の小型石棒・石剣・石刀が作られるようになるようである。

中部日本では，晩期以降に石刀が台頭することが知られている［後藤前掲］が，それらは明確な製作遺跡が不明であるため，素材と製品の関係性を特定するのが難しい。しかし各遺跡で出土する石刀の石材と形態の観察から，新潟県西部から岐阜県飛騨地方を通り石川県加賀地方へと連なる飛騨

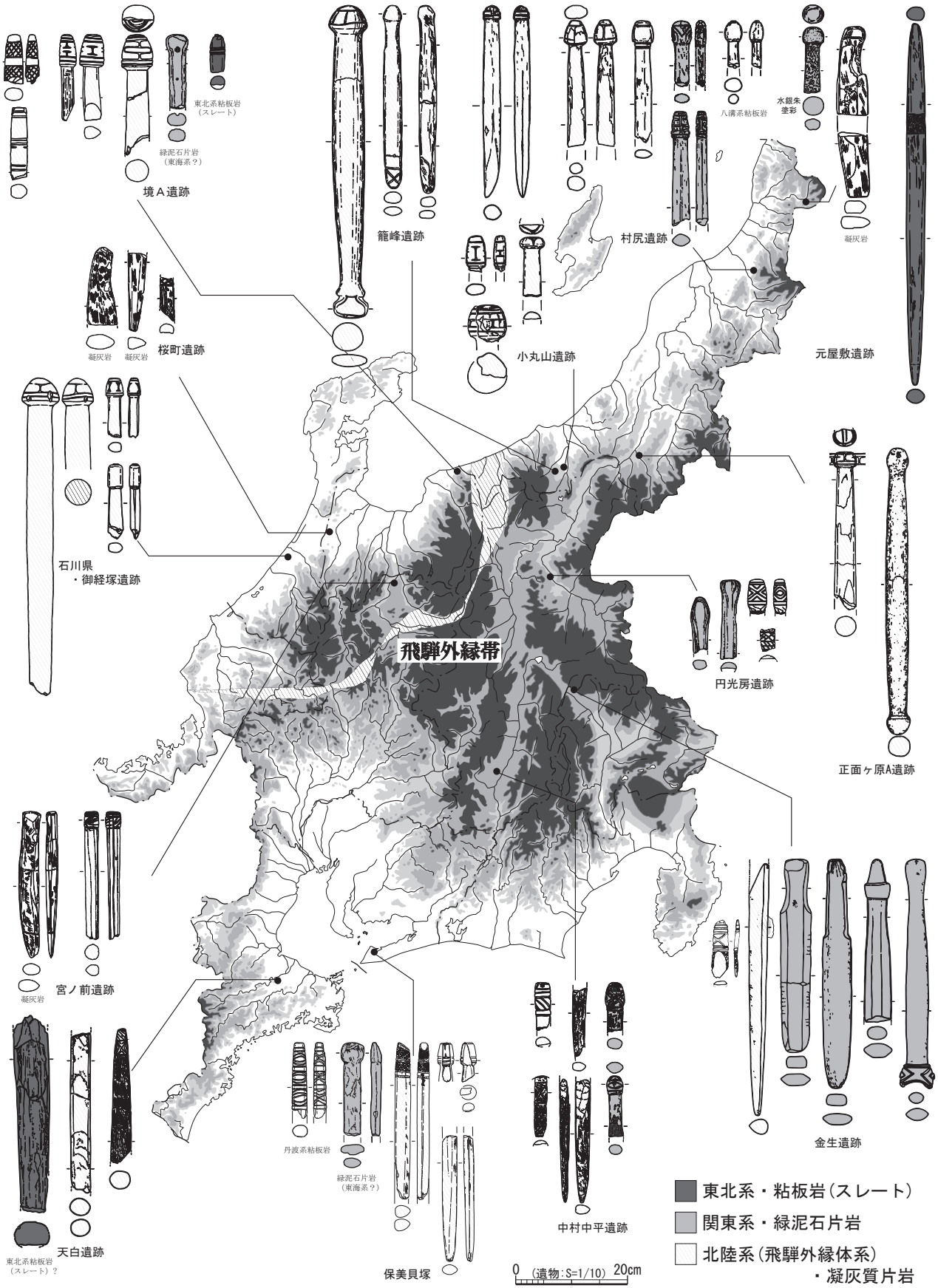


図8　晩期前半中部日本における主要な石剣・石刀の展開（遺物実測図は各報告書より転載）

外縁帯などで産出する凝灰質片岩を用いているものと推測される［図8斜線部，長田2011a］。また，近年，富山県桜町遺跡において，遺跡近隣で採集される凝灰岩を用いた太身の石刀製作［図8，山本2007］が明らかになったが，石川県御経塚遺跡など展開範囲は極めて狭小であり，出土する遺跡においても小型石棒類の主体を占めるものではなく，代替品としての補助的な存在であったものと考えられる。同様に中部日本以外の地域で製作されたと考えられる小型石棒類としては，新潟県域に東北や関東地方東部で製作された粘板岩製の石剣が，甲信越地方では関東地方西部で製作された緑泥石片岩製の石剣が，東海地方では関西地方で製作されたと考えられる粘板岩製の石刀がそれぞれ散見され，これらは断片的な隣接地域との交渉と評価されよう。

以上のことから，晩期前半における中部日本で主体となった小型石棒類は，先にあげた飛騨外縁帯産と考えられる凝灰質片岩を用いた石刀である。これらが北陸ないしは岐阜県飛騨地方で製作され，甲信越・北陸・東海といった中部日本一円へともたらされていたものと考えられる。また地理的な状況から，それぞれに隣接する東北地方や関東地方，あるいは関西地方で製作された小型石棒類が少量利用される点も注意されよう。このことは小型石棒に伴う流通・交渉が，中部日本という範囲内で完結するのではなく，隣接する他地域など，より広範な範囲へ交換網がつながっている状況が想定される。そうした中で，桜町遺跡例のように遺跡近隣の石材を用いて簡便に製作された代替品としての石刀のように，狭小な範囲に流通する儀器があった点も注意する必要があろう。こうした小型石棒の流通については，凝灰質片岩の産地と考えられる飛騨外縁帯周辺地域（北陸～岐阜県飛騨地方）において大型の優品が多く出土することなどから，こうした地域が中部高地や太平洋岸地域などよりも優位にあったものと考えられ，原産地周辺による流通網の掌握が想定される。

また，小型石棒類自体が具体的にどのような機能・用途を有していたのかは不明であるが，特定産地の石材に固執した，特定形態の儀器を保有する状況からは，保有すること自体に何らかの特別な意図が存在した可能性を指摘でき，その機能としては極めて社会的な要素が推定されよう。

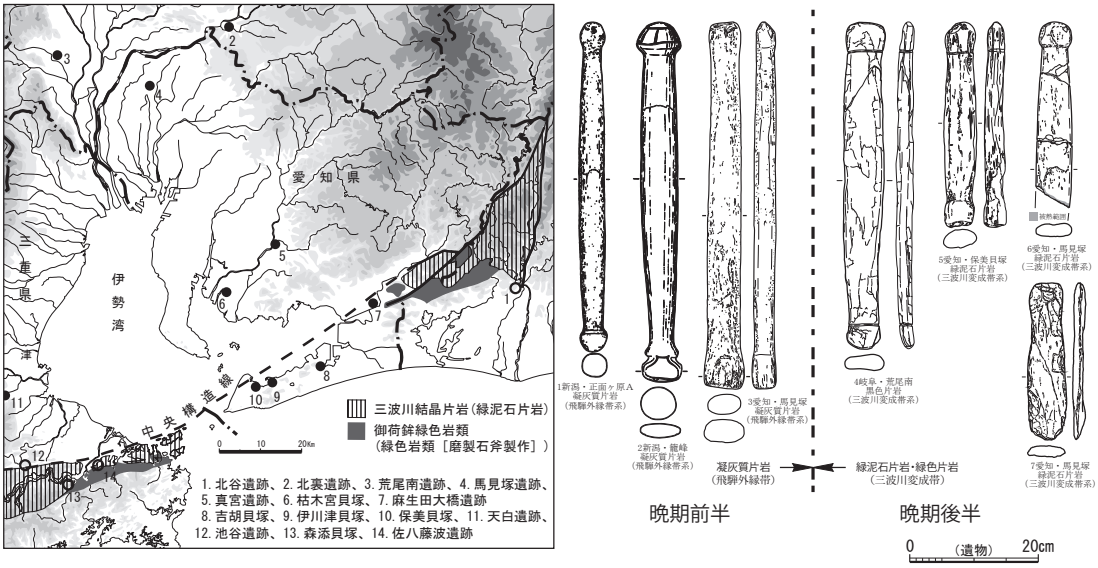


図9　晩期東海の主要な石剣・石刀出土遺跡および石材分布（左）と時期変遷による両頭石剣類の材質転換（右）
（左図○は石剣・石刀類製作遺跡，右図遺物実測図は各報告書より転載）

晩期後半になると，東日本の多くの地域で小型石棒・石剣・石刀の利用が減少する傾向にあり，中部日本においても北陸や中部高地において小型石棒類は姿を消していく。特に北陸地方での減少は顕著であり，飛騨外縁帯に由来する凝灰質片岩を用いた小型石棒類の製作も衰退していったものと考えられる。こうした状況を如実に示すのが，東海地方における晩期後半を中心とする両頭石剣類である（図 9）。この両頭石剣類は，その形態から晩期前半に北陸地方を主体にみられる両頭石棒に由来するものと考えられるが，晩期後半に入り北陸地方では利用が衰退し出土数が激減する。これらを受容していた東海地方においても，馬見塚遺跡でみられたわずかに頭部がくびれる両頭石棒（図 9–3）を最後に姿を消す。これに代わるように登場するのが，東海地方を走る中央構造線に沿ってみられる三波川変成帯に産する緑泥石片岩を用いた石剣類（図 9–4～7）であり，三波川変成帯に沿って静岡県西部や三重県伊勢地域に製作遺跡が知られている（図 9 左）。三重県森添遺跡［奥ほか 2011］では大量の未製品が出土しており，東海地方だけでなく隣接する関西地方へも運ばれていた可能性も考えられよう。これらは非常に粗雑な整形であり，特に仕上げである研磨調整がほとんどなされておらず，晩期中葉以前に見られた両頭小型石棒の代替品と考えられる。甲信越地方でも変化がみられ，新潟県北部では東北地方の石剣・石刀が再び散見され，甲信地方では関東地方の緑泥石片岩がわずかにみられるなど，晩期中葉以前とは異なる状況がうかがえる。

以上のように小型石棒類では，後期後半に広域に展開した東北地方産･成興野型石棒に代わって，晩期初頭以降に東北地方産・熊登型石剣が登場した以後，列島各地域において小型石棒類の製作が本格化し，晩期前葉には各地方を単位とするような範囲に供給・受容されるようになり，中部日本では石刀が主体となっていく。ここにおいて初めて中部日本で広域に共有される考古事象がみられる訳だが，その中核を担っていた地域は，先に挙げた石刀を製作していたと考えられる北陸西部～岐阜県北部であったと推測される。石刀と同様の展開を見せる石製儀器としては石冠があげられ，石刀と石冠の展開により北陸・飛騨地方の主体性が高まったものと考えられる。しかし，晩期後半になると当該地域では石刀・石冠といった石製儀器が衰退するとともに，環状木柱列が大型化する［山本 2013］など，晩期前半までに確立した主体的な状況からの変化がうかがえる。一方で，以前として前段階以来の小型石棒をはじめとする石製儀器を求める東海地方では，晩期後半・五貫森式期の頃より独自に両頭石剣を模倣製作し用いるようになる。同様に甲信越地方でも石製儀器の変化がみられ，中部日本側の主体的地域であった北陸・飛騨地域ではない，他の隣接地域との結びつきを強めていくようである。

先にも触れたように，保有すること自体に特別な意図が存在したと考えられる小型石棒類は，社会的機能を有した石製儀器として位置づけられ，小型石棒類が広域・狭小など様々に展開する状況は，小型石棒類を介した集団紐帯の強化などの集団関係を示している可能性が考えられる。すなわち小型石棒製作地域では，小型石棒類を製作・流通させるとともに，その背景となる小型石棒類自体の機能・意義を併せて発信し，さらに消費側が小型石棒類および機能・意義を含めて受容していたことが想定され，地域集団の統合に大きな役割を担ったものと考えられる。小型石棒を保有することは，その発信源である集団との紐帯関係の誇示などを意図したものであろうか。そうであるとすれば，少量であれば隣接地域の小型石棒類を受容し，決して一元的な供給・消費にならない多様な小型石棒の出土状況も，複雑な集団関係を示唆したものであろう。

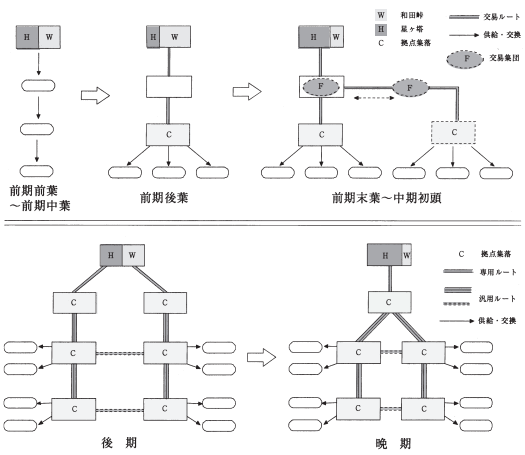
4）黒曜石

黒曜石は旧石器時代より用いられ，列島各地の黒曜石産地から消費遺跡への移動を基に，交易論が盛んに議論されている。中部日本では長野県諏訪湖周辺の和田峠・星ヶ塔・星糞峠といった黒曜石産地や，静岡県東端の伊豆半島や海を渡った神津島（東京都）などの黒曜石産地が存在し，中部日本の縄文時代を考える上で不可欠な特産品であると言えよう。これらの黒曜石は，原産地周辺を含めた中部日本全体でも用いられているが，それにも勝るとも劣らない量の黒曜石が関東地方へもたらされていることが知られている。特に縄文時代前期より黒曜石の流通量が増加していくとともに，黒曜石産地が隆盛するだけでなく，黒曜石の流通経路が目まぐるしく変化することが知られている。晩期においては星ヶ塔産黒曜石が大量に関東地方へと運ばれている。［建石ほか2011］。

これら信州産黒曜石の関東平野への展開を詳細に検討している大工原豊によれば［大工原2007］，黒曜石の交易については前期後葉には流通を管理する集団の存在が想定され，黒曜石を流通するための交易ルートが確立する（図10）。さらに前期末葉には，山梨県天神遺跡［新津ほか1994］など大規模な中継遺跡が出現し，黒曜石のサイズ・品質の選別管理が徹底され，中継遺跡から黒曜石を運んでいく交易集団の存在も想定される。

こうした信州産黒曜石流通システムは中期前半に崩壊するが，中期後葉には神津島産黒曜石の伊豆ルートの再開［池谷2005］や，信州産星ヶ塔系黒曜石の大量流入，栃木県高原山黒曜石の流入［建石・津村2005など］など新たな黒曜石流通が活発化する。これらのうち，後期以降も晩期に至るまで，星ヶ塔系黒曜石が山梨ルートで南関東へ搬入されるルートが主体的に継続していく［池谷2006］。一方で，後期前葉以降には和田峠産黒曜石が群馬ルートで関東へ流入するようになり，後期には2つの異なる流通ルートが併存していた可能性が指摘されている［大工原前掲］。さらに晩期になると，黒曜石は星ヶ塔系黒曜石へ一元化され，供給元の星ヶ塔遺跡では，黒曜石の岩脈から直接原石を採掘する採掘抗群の存在が確認され［藤森・中村1962，宮坂2004など］，集団間での経済的格差の増大とそれに伴う社会的緊張関係の発生が想定されている［大工原前掲］。

これら後期以降の黒曜石流通では，前期と異なり一定の基準に沿った原石の選別作業などが行わ



時期	前期前葉～中葉	前期後葉	前期末葉～中期初頭	中期前葉～後葉	中期末葉～後期前葉	後期中葉～後葉	晩期
入手方法	転石採取	表層採掘	露頭（二次堆積層）採掘	転石採取？	転石採取	露頭（二次堆積層）採掘	露頭（岩脈）採掘
主たる産地	和田＞星ヶ塔＞男女倉	和田＞星ヶ塔	星ヶ塔＞和田	星ヶ塔・和田・麦草	山梨ルート：星ヶ塔群馬ルート：和田＞星ヶ塔	山梨ルート：星ヶ塔群馬ルート：和田＞星ヶ塔	星ヶ塔
原石形状	亜円礫・亜角礫	亜角礫・旧石器	角礫（剥離面状）	亜角礫・角礫	亜角礫	亜角礫・角礫（剥離面状）	角礫（礫面・剥離面状）
原石サイズ	中形・小形	超大形・中形・小形	超大形・中形・小形（山梨ルート：大形）	中形・小形・超小形	大形・中形・小形・超小形（ズリ）	大形・中形・小形・超小形（ズリ）	中形・小形・超小形（ズリ）
特殊な出土状況		集落内安置・流通途中の集積	流通途中の集積・土壌墓への副葬・集落内安置		容器内収納	集落内安置	
黒曜石の価値	生存財	一部威信財（超大形原石）	一部威信財（超大形原石・天神型石匙）	生存財	生存財	一部威信財（大形原石）	生存財
流通の基準	重量・個数	サイズ・個数（2kg>300g>100g）	サイズ・個数・透明度（2kg>300g>100g）		重量（1kg？）	重量（1kg？）	重量
流通管理集団	なし	群馬	山梨		諏訪－山梨 和田－群馬	諏訪－山梨 和田－群馬	原産地？
流通形態	交換連鎖	仲介者交易（常設市場タイプ）	仲介者交易（行商タイプ）	交換連鎖	交易（汎用ルート利用）	交易（汎用ルート利用）	交易（汎用ルート利用）

図10　縄文時代前期と後晩期における中部日本から関東地方の黒曜石流通モデル
（大工原2007より転載の上，関係部分を強調）

れず，超小形原石（ズリ）が増量目的で混入され，中・小形原石と共に末端消費地まで流通するようになることが指摘されている［大工原前掲］。こうした状況から，晩期における黒曜石流通は未だ不明瞭な点も多いが，黒曜石のみを流通するシステムではなく，黒曜石以外の多様な特産品をも含めた交換・交渉が行われ，関東地方に張り巡らされた交換流通網（汎用ルート）を経由した流通・交易が想定されている［大工原前掲］。このように黒曜石交易は，中期以前の黒曜石原産地が主導となり寡占的に黒曜石のみを流通させる状況から，晩期には黒曜石が多様な流通品・特産品の１つに過ぎない状況へと変化していったと考えられる。この結果，黒曜石原産地およびその周辺地域の優位性は失われ，関東地方に張り巡らされた流通交易網の原理・原則の一角に過ぎない状況へと，黒曜石交易が変化していったものと考えられよう。すなわち，晩期においては黒曜石という魅力的な特産品の原産地の遺跡・集団ではなく，それらを流通させる交易網を把握する側の遺跡・集団に主導権があったと言えよう。

社会の複雑化へと傾倒していたとされる関東地方の中期以後の社会に対し，黒曜石は重要な特産品の１つであった点は明らかであろう。それは晩期においても同様であり，関東地方の諸遺跡から出土する黒曜石量や，原産地における黒曜石採掘坑の増大からも指摘できよう。しかし，多様な特産品が流通していた関東地方では，素材としての黒曜石のみでは優位性は保てず，流通網に組み込まれる中で，流通網を構築していった消費側である関東地方に主導権が移譲していったのであろう。黒曜石の流通では，原産地を押さえ特産品である黒曜石を安定的に確保することも重要ではあるが，それにもまして黒曜石を流通させる交易システムを構築し，さらには交易システムの実権を握ることこそが，重視されたものと考えられる。そうした意味では，黒曜石原産地側である中部日本は末端の生産地に過ぎず，多様な特産品の流通などにより複雑化した可能性のある関東地方ほどは，黒曜石流通に関しても複雑化の度合いは低かったものと考えられる。

❺……晩期中部日本における社会描出

以上のように，晩期中部日本において主要な特産品と考えられる磨製石斧・玉・小型石棒類・黒曜石の動態を概観してきた。これら特産品の動態からは，製作から流通･消費に至る過程において，様々なあり方が確認できた。各地の大型磨製石斧のように分布範囲が小地域における土器型式分布圏と同様の傾向を示すものから，蛇紋岩製小型磨製石斧や小型石棒類のように中部日本全域に供給されるもの，黒曜石のように関東地方をはじめ隣接する地域へと供給されるもの，玉のように東北地方を中心に東日本各地へ，さらには列島各地へと供給されるものまでみられ，まさに多様な流通の状況が確認された。さらに，これらの流通の状況は，いずれもが完全に一致しない点も強調されるべきであろう。したがって，今回挙げた特産品の流通においては，その流通網自体が複雑である状況を示している。こうした複雑な流通網を積極的に評価すれば，その背景となる社会に対しても，均一的な平等社会というよりは，むしろ個別的で複雑化した社会の存在を想定することも可能であろう。特に中部日本から隣接する地域へ，さらには汎日本列島へと展開を見せる玉や黒曜石については，逓減的ではない分布状況から，より複雑な流通の存在とともに，その背後に存在する複雑化した社会が想定されよう。

しかし，東日本を中心とする汎日本列島という視点でみると，玉や黒曜石の流通においては，玉にみられる東北地方北部における寡占的な消費の状況，黒曜石にみられる関東地方への流通網［大工原 2007］など，生産地である中部日本が積極的に流通を掌握できていない状況がうかがえる。すなわち，晩期においては中部日本から他地域へと流通する特産品は，他地域主導により流通しているものと考えられる。まさにこれら流通網・流通原理を掌握する地域こそが，晩期社会の複雑化が議論される東北地方であり，関東地方なのである。玉・黒曜石に代表される中部日本以外の地域へともたらされる特産品にみられた複雑な流通は，消費地側である東北・関東地方により主導される流通網・流通原理に基づくものであり，中部日本における流通の実態は，これらの地域の影響をを受けた周辺部分に位置するものと評価もできよう。

こうした晩期中部日本の状況と対照的であるのが，中部高地や北陸各地などが盛行期を迎える中期中部日本の状況であろう。中期中部日本では，硬玉製大珠や黒曜石・蛇紋岩製磨製石斧などが，晩期同様に列島規模で優位性を持つ特産品として存在している。晩期と大きく異なる点は，これら特産品を含め様々なモノに対して意義付けを行い，説明原理として存在したであろう精神文化の高揚が色濃くみられる点である。特に，特殊器形土器や土偶・石棒の発達は，中部日本を代表する中期の縄文時代文化であり，こうした精神文化的高揚こそが，意義付けと説明原理となり，流通の主導権を得る役割を担っていた可能性も考えられよう。晩期中部日本においても，小型石棒類や石冠など多様な石製品が台頭するように，精神文化的高揚を指摘することはできるが，それらの精神文化的要素･説明原理は，系譜的には東北地方や関東地方など他地域に求められるものが少なくない[(11)]。すなわち，晩期中部日本独自に高揚した精神文化・説明原理ではないものと考えられ，これらの台頭・欠落が中期以前の状況とは大きく異なることが指摘できよう。

そうした意味では，石刀をはじめとする小型石棒類は，晩期中部日本において製作・消費される傾向にあり，独自の意義付けが行われた儀器のひとつであろう。飛騨外縁帯産と考えられる凝灰質片岩製の石刀は，中部日本に多く見られることが指摘され［後藤 1987］，特に凝灰質片岩製の小型石棒類は，他地域への積極的な展開はほとんどみられず，中部日本に内在する形で流通・消費された特産品である。明確な製作遺跡（原産地域）が不明瞭であるため断片的な状況証拠ではあるが，石刀を中心とする小型石棒類の分布数量を踏まえれば，原産地と考えられる北陸・岐阜県飛騨地方に集中する傾向にある。さらには，数量だけでなく優品を多く保有する傾向からは，これらの地域が流通を掌握するとともに，石刀をはじめとする小型石棒自体の意義づけなどをも行っていたものとが考えられ，小型石棒類を基準に他の地域よりも優位にあった可能性も想定されよう。

以上のように，　晩期中部日本では，特産品の流通・消費から，単純な流通原理により特産品が流通していくのではなく，複雑かつ多様な流通・消費の状況が読み取れ，これら流通の背景にある社会自体においても複雑化が想定された。しかし，玉や黒曜石のように複雑な流通を示す特産品については，原産地・製作地域側である中部日本主導の流通ではなく，消費側である東北・関東地方主導の流通であるものと考えられ，中部日本はこうした流通・流通原理に組み込まれた周辺の地域ともみなすことができよう。一方で，中部日本内部で流通･消費がみられる小型石棒類については，部分的に複雑化した流通の実態も垣間見えるが，背後に存在する社会までもが複雑化していたとは積極的には判断しにくい。したがって晩期中部日本では，多様な流通に代表されるようにある種の

複雑化は読み取れるものの，東北・関東地方で描出されるほどには，社会の複雑化自体が見えにくい状況であったものと推測される。あるいは中部日本の社会自体が，主体的に複雑化していく状況ではなく，受動的あるいは従属的に複雑な状況へと変化したに過ぎず，実態としては複雑化に至っていない状況として評価すべきであろう。

ここで課題となるのが，冒頭から用いている複雑化に対する評価である。複雑化とは，言わば平等社会からの移行状況を抽象的に評価する便宜的な表現であり，その度合いを何らかの形で明示する必要があろう。そうした意味では，本稿で扱ったような特産品の動態を元に，流通・流通原理を復元することで，流通網の発達・拡大などをもって複雑化の度合いとすることはある程度可能であろう。しかし，そのためには中間地域を含めた詳細な遺物の動態を明示する必要があり，本稿においてもそうした点が不十分である点は否めず，今後の課題としたい。

今後は，列島各地に張り巡らされたであろう交易流通網を視野にいれつつ，その具体的な提示を行うことで，“複雑化”・“高度化”とされる列島各地での縄文時代晩期社会の変化を程度として評価していく必要がある。と同時に，こうした列島に広域の交易流通網を可能にしたであろう集団社会の形態についても，既存の単純な集団組織としての理解のみでは限界に達しているのではなかろうか。血縁集団・親族集団といった集団構成だけでなく，遺跡あるいは小地域を規定するような，地縁的な社会関係をも意識する必要があろう。

その一方で，小型石棒類や石冠など石製儀器が一栄一落するように，複雑化した交易流通網自体が安定的に長期継続していかない点についても注意する必要があろう。晩期後半における列島規模での変化は，気候冷涼化などの環境変化によるもの［今村 2000］だけでなく，こうした縄文時代の社会自体が抱えていた，複雑化へと向かう社会状況を維持・説明・共有できないような，内在的な問題が存在した可能性も十分考慮すべきであろう。そうした意味においても，流通網を維持し，あるいは新規構築していく状況には，縄文時代晩期社会の方向性が伺え，“社会複雑化”とされる社会変化の要因が潜んでいるものと考える。

註

（1）――本来であれば，前稿［長田 2011b］で行ったように，対象地域における縄文時代晩期遺跡を網羅的に検討し，個々の遺跡における遺構・遺物の出土量などを明示した上で，検討を進めるべきであろう。しかし，対象地域における主要遺跡の幾つかは，詳細な情報が不明な遺跡もあり，前稿のような検討が十分に行えなかった。この点については，今後の大きな課題として捉え，本稿では関連する資料の表層的な検討に留まる点を明記しておく。

（2）――縄文時代前期後半以降に定着した磨製石斧製作遺跡では，磨製石斧を介した交換・交渉が行われていたものと考えられる［山本 1991］。しかし，その後の磨製石斧製作遺跡の分布や変遷を考慮すれば，少なくとも，中期以前の磨製石斧製作および交換と，晩期を含めた後期以降の磨製石斧製作の状況は大きく異なるものと考えられ，本稿においては中期以前の磨製石斧製作・交換による，社会の複雑化については触れないこととした。

（3）――定角式磨製石斧に多用されるいわゆる“蛇紋岩”とされてきた石材については，岩石学的にいう蛇紋岩ではなく，透閃石岩やロディン岩といった貴石に当たるものであることが指摘されている［中村 2010］。したがって，その産出地は蛇紋岩以上に限定的であり，具体的には新潟県糸魚川市の硬玉産地とされる姫川支流の小滝川や西隣の青海川より産出したものが多くを占める。しかし，発掘調査報告書などでは現在でも“蛇紋岩”と記載されることが多く，本稿においても混乱を避けるため蛇紋岩と表記する。

（4）――定角式磨製石斧の形態差については，寺地遺跡や境Ａ遺跡報告などにより提示されている。境Ａ遺跡の

分析では，長さ8cm，幅3.5cm，重量75gを境に大型（伐採斧）と小型（加工斧）に二分している［山本ほか1991］。

（5）――小島秀彰氏のご教示による。

（6）――縄文時代において，磨製石斧を柄に直接装着した出土例は，管見では確認できていない。福井県鳥浜貝塚における斧柄の検討［網谷2007］をはじめ，各地の斧柄の検討［山田1991・2009］などから，定角式磨製石斧には膝柄を，乳棒状磨製石斧には直柄を用いたものと推測されている［山田前掲］。したがって，定角式磨製石斧と乳棒状磨製石斧の差は，柄とセットになった斧全体の問題として捉えるべきものと考える［長田2012a］。また磨製石斧製作遺跡では，磨製石斧自体の消費も一般の消費遺跡よりも多くみられることが多く，単に磨製石斧を製作するだけでなく，磨製石斧を用いた木工加工を指摘する意見もある。これらのことから，状況証拠ではあるが，磨製石斧と斧柄とがセットになった交換・交渉が想定されよう。

（7）――金生遺跡では，直接的な玉製作に関連する穿孔途中の未製品は出土しておらず，製作遺跡とは判断できない。また未穿孔の研磨製品は，先に玉製作の工程にみられるように，欠損などの失敗や労力を要する穿孔後に研磨を施すことを考慮すれば，研磨された時点で製品とみなされる。したがって，金生遺跡は玉製作に関連する遺跡ではなく，消費する側として位置づけられよう。

（8）――晩期東北で多く出土する玉は，硬玉をはじめとする新潟県西部産の玉類である点については，多くの指摘がある［鈴木2005など］。しかし，それらが理化学的分析により実証された事例は極めて少なく，あくまで肉眼観察による同定レベルに留まる場合が大半であり，本稿もこうした同定に追従している。将来的には，理化学的分析による産地同定が必要不可欠である点を強調しておきたい。

（9）――東北地方日本海側と太平洋側における出土遺物の差異については，金子昭彦が亀ヶ岡文化の土偶について，「東北地方北部では太平洋側で出土量が多く，日本海側で少ない。これは一般的な遺跡に残存する装飾品の出土傾向とほぼ逆の関係にあり，何らかの関連が疑われる」［金子2006］と指摘している。玉における日本海側に集中する状況と関連し，興味深い指摘であると言えよう。

(10)――小型石棒の範囲については様々な定義がみられる［後藤1986・1987，角田1995など］が，本稿においては晩期中部日本にみられる小型石棒・石剣・石刀をはじめとする細身で長い棒状石製品全体を含めて扱う。

(11)――詳細な説明を省くが，後期後半における成興野型石棒の展開以後にみられる小型石棒類の展開［長田2012b］や，石冠の在り方［増子1999］などから，晩期中部日本にみられる各種石製品の系譜は，他地域にたどれるものが少なくない。同様に，土偶などにおいても，後期中葉における関東地方の山形土偶にみられる中部日本各地への影響［上野2013］や，晩期中葉以降の遮光器土偶の広域展開［金子2001］など，晩期中部日本以外の地域から受容されたとされるものが少なくないと言えよう。

引用・参考文献

池谷信之2005「見高段間遺跡出土黒曜石の原産地推定と神津島黒曜石の流通」『縄文時代』第16号　79–94頁　縄文時代文化研究会

池谷信之2006「環中部高地南東域における黒曜石流通と原産地開発」『黒曜石文化研究』第4号　161–171頁　明治大学博物館

石黒立人編2011『論集 縄文／弥生移行期の社会論』伊勢湾弥生社会シンポジウム・前期篇　ブイツーソリューション

市原寿文・大参義一1965「Ⅱ縄文文化の発展と地域性6東海」『日本考古学Ⅱ 縄文時代』174–192頁　河出書房新社

伊藤正人2005「愛知県出土の縄文ヒスイ玉集成」『玉文化』2　183–193頁　日本玉文化研究会

伊藤正人2013「第3章　地域の特性　6　東海」『講座日本の考古学3　縄文時代（上）』412–440頁　青木書店

伊藤雅文・谷口宗治2006「石川県出土の縄文時代ヒスイ製品集成」『玉文化』3　131–140頁　日本玉文化研究会

今村啓爾2002『縄文の豊かさと限界』（日本史リブレット2）　山川出版社

岩瀬彰利2003「縄文時代の加工場型貝塚について－東海地方における海浜部生業の構造－」『関西縄文論集1（関西縄文時代の集落・墓地と生業）』189–205頁　六一書房

岩瀬彰利2008「東海の貝塚」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』シンポジウムⅠ縄文時代晩期の貝塚と社会　47–68頁　同大会実行委員会

上野修一2013「山形土偶の成立と展開」『第10回土偶研究会　奈良県大会資料』5–18頁　土偶研究会

大坪志子2015『縄文玉文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－』雄山閣

岡本　勇 1959「土器型式の現象と本質」『考古学手帖』6　1–2 頁　塚田光
奥　義次ほか 2011『森添遺跡』度会町文化財調査報告 6　三重県度会町教育委員会
長田友也 2005「東海地方における磨製石斧製作について－三重県いなべ市川向遺跡の磨製石斧製作を中心に－」『考古学フォーラム』18 号　47–59 頁　考古学フォーラム
長田友也 2008「総括　墓制からみた晩期東海の地域社会の復元に向けて」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』シンポジウムⅠ縄文時代晩期の貝塚と社会　209–220 頁　同大会実行委員会
長田友也 2011a「第 2 章　小型石棒類からみた保美貝塚」『保美貝塚の研究』南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第 3 冊　113–124 頁　南山大学人類学博物館
長田友也 2011b「縄文時代晩期社会論－伊勢湾・三河湾地域を中心に－」『論集　縄文 / 弥生移行期の社会論』伊勢湾弥生社会シンポジウム・前期篇　21–70 頁　ブイツーソリューション
長田友也 2012a「広域流通する縄文石器　磨製石斧－製作技術の変遷と流通－」『季刊　考古学』第 119 号（特集縄文石器が語る文化と社会）　66–70 頁　雄山閣
長田友也 2012b「広域流通する縄文石器　石棒の製作と流通」『季刊　考古学』第 119 号（特集縄文石器が語る文化と社会）　79–84 頁　雄山閣
親跡　喬 1991『図録　小丸山遺跡』小丸山遺跡発掘調査団　中郷村教育委員会
金子昭彦 2001『遮光器土偶と縄文社会』ものが語る歴史シリーズ④　同成社
金子昭彦 2006「東北地方北部における縄文時代晩期の「装飾品」(1) －分類と代表的な遺跡の集成－」『紀要』第 25 号　23–46 頁　(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
鎌木義昌編 1965『日本考古学Ⅱ　縄文時代』河出書房新社
川添和暁 2011『先史社会考古学－骨角器・石器と遺跡形成からみた縄文時代晩期－』六一書房
川添和暁 2015「縄文時代後晩期の土製垂飾類（玉類）について－東海地域の事例から－」『研究紀要』第 16 号　1–16 頁　愛知県埋蔵文化財センター
関西縄文文化研究会編 2004『縄文時代の石器Ⅲ－関西の縄文後期・晩期－』　関西縄文文化研究会
木島　勉 1995「縄文時代における翡翠製玉類の生産－研究の現状と課題－」『フォッサマグナミュージアム研究報告』　111–25 頁　フォッサマグナミュージアム
日下宗一郎･米田　穣･山田康弘 2015「稲荷山貝塚より出土した縄文時代人骨の放射性炭素年代測定」『第 69 回 (2015) 日本人類学会大会抄録集』日本人類学会
工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代の環境文化史－高精度放射性炭素年代測定と考古学－』新泉社
熊谷常正 2013『南部北上高地における粘板岩系石器の研究』（科学研究費成果報告）
栗島義明 2007「硬玉製大珠の社会的意義～威信材としての再評価～」『縄文時代の社会考古学』83–106 頁　同成社
小池義人ほか 2000『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ（遺物編）』　新潟県中郷村教育委員会
後藤信祐 1986・87「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究（上）・（下）」『考古学研究』33–3・4　31–60 頁・28–48 頁　考古学研究会
小林圭一 2005「山形県内出土の縄文時代ヒスイ製石製品について」『玉文化』第 2 号　146–161 頁　日本玉文化研究会
小林謙一・工藤雄一郎編 2011『縄文はいつから⁉ －地球環境の変動と縄文文化－歴博フォーラム』　新泉社
小林　徳 2009「故竹田祐司氏採集の藤橋遺跡遺物について」『長岡市立科学博物館研究報告』44 号　87–96 頁　長岡市立科学博物館
佐藤雅一 2015「型式の広がりが意味するもの」『津南学』第 4 号　192–200 頁　ほおずき書籍
佐藤由紀男 1996「突帯紋・条痕紋土器期における磨製石斧の生産と流通」『考古学論究』第 4 号　75–102 頁　立正大学考古学会
佐藤禎宏ほか 1984『砂川Ａ遺跡発掘調査報告書』朝日村埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集　山形県朝日村教育委員会
塩入秀俊ほか 1980『深町－長野県小県郡丸子町深町遺跡郡緊急発掘調査概報－』長野県丸子町教育委員会
篠崎健一郎ほか 1990『一津遺跡』大町市教育委員会
砂上正夫編 2014『輪島市塚田遺跡発掘調査報告書』輪島市教育委員会
鈴木克彦 2005「縄文勾玉」『季刊考古学』第 89 号（縄文時代の玉文化）　25–27 頁　雄山閣
関　雅之ほか 1982『村尻遺跡Ⅰ』新発田市埋蔵文化財調査報告第 7　新発田市教育委員会
芹沢長介 1958「縄文土器」『世界陶磁全集』第 1 巻　河出書房新社
大工原　豊 1996「2. 縄文時代（2）石器」『考古学雑誌』第 82 巻第 2 号　26–36 頁　日本考古学会
大工原　豊 2007「黒曜石交易システム」『縄文時代の考古学 6　ものづくり』164–177 頁　同成社

高橋保雄 1999「阿賀野川以北の磨製石斧生産の様相」『新潟考古学談話会会報』20　12–16頁　新潟考古学談話会
高橋龍三郎 2001「総論：村落と社会の考古学」『現代の考古学』第6巻　1–93頁　朝倉書店
高橋龍三郎 2004『縄文文化研究の最前線』早稲田大学
高橋龍三郎 2014「第9章　縄文社会の諸側面，3縄文社会の複雑化」『講座 日本の考古学4縄文時代 下』616–651頁　青木書店
高堀勝喜 1965「Ⅱ縄文文化の発展と地域性　4北陸」『日本考古学Ⅱ　縄文時代』133–151頁　河出書房新社
高堀勝喜編 1983『御経塚遺跡』石川県野々市町教育委員会
滝沢規朗編 2002『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ　元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』朝日村文化財報告書第22集　新潟県朝日村教育委員会
竹内英昭ほか 1999『宮山遺跡』三重県埋蔵文化財センター
建石　徹ほか 2011「シンポジウムⅠ　石器時代における石材利用の地域相－黒曜石を中心として－栃木県・群馬県内諸遺跡出土黒曜石の産地分析－旧石器時代・縄文時代資料を中心として－」『日本考古学協会2011年度栃木大会研究発表資料集』269–306頁　同実行委員会
建石　徹・津村宏臣 2005「関東周辺における縄文時代の黒曜石搬入路の復元」『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』 67–70頁　日本考古学協会
田中耕作ほか 2014『中野遺跡・庄道田遺跡発掘調査報告書』新発田市埋蔵文化財調査報告51　新発田市教育委員会
田中良之 1998「出自表示論批判」『日本考古学』第5号　1–18頁　日本考古学協会
谷口康浩 2011『縄文文化起源論の再構築』同成社
田村陽一 2006「三重県出土の縄文時代ヒスイ玉集成」『玉文化』3　141–148頁　日本玉文化研究会
田端　勉 1975「第1章　神郷下遺跡」『縄文Ⅰ』豊田市埋蔵文化財調査集報第2集　豊田市郷土資料館報告7　豊田市教育委員会
土谷崇夫 2007「磨製石斧の供給」『縄文時代の考古学6 ものづくり 道具の製作の技術と組織』 232–239頁　同成社
土谷崇夫 2013「石斧流通試論」『立命館大学考古学論集Ⅵ（和田晴吾先生定年退職記念論集）』41–51頁　立命館大学文学部日本史研究学域考古学・文化遺産専攻
角田真也 1995「細形石棒の研究」『國學院大學考古学資料館紀要』第14輯　127–176頁　國學院大學考古学資料館
寺村光晴ほか 1974『細池遺跡』糸魚川市教育委員会
寺村光晴編 1987『史跡寺地遺跡』新潟県西頚城郡青海町
東海縄文研究会 2013『東海地方における縄文時代晩期前半の社会』第1回東海縄文研究会シンポジウム世予稿集
長沼　孝・畑　宏明 1998「日本国北海道ピリカ・湯の里4遺跡出土の旧石器時代玉類の観察」『東亜玉器』330–337頁　中国考古藝術研究中心
中村　大 1999「墓制から読む縄文社会の階層化」『最新　縄文学の世界』48–60頁　朝日新聞社
中村由克 2010「野尻湖遺跡群における石斧石材の再検討－「蛇紋岩」とされた石材の正体を探る－」『日本考古学協会第76回総会　研究発表要旨』126–127頁　日本考古学協会
永峯光一 1965「Ⅱ縄文文化の発展と地域性　5中部」『日本考古学Ⅱ　縄文時代』152–173頁　河出書房新社
新津　健編 1989『金生遺跡Ⅱ（縄文時代編）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第41集　山梨県埋蔵文化財センター
新津健ほか 1994『天神遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書97　山梨県教育委員会
馬場保之ほか 2011『中村中平遺跡』飯田市教育委員会
春成秀爾 1973「抜歯の意義（1）」『考古学研究』20–2　25–63頁　考古学研究会
春成秀爾 2002『縄文社会論究』塙書房
林　謙作 1995「階層とは何だろう」『展望考古学』考古学研究会
藤森栄一・中村龍雄 1962「星ヶ塔黒耀石採掘址」『古代学』第2巻第1号 58–67頁　古代学協会
藤原秀樹 2006「北海道における縄文時代後期・晩期の墓制とヒスイ玉」『玉文化』3　23–90頁　日本玉文化研究会
舟橋京子 2003「縄文時代の抜歯施工年齢と儀礼的意味－晩期西日本の諸遺跡出土人骨を対象として－」『考古学研究』第50巻1号　56–76頁　考古学研究会
前田清彦・小島　隆ほか 1993『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会
増子　誠 1999「石製祭祀遺物の受容」『季刊考古学』第69号（特集　縄文時代の東西南北） 65–69頁　雄山閣
増子康眞 1975「第3章　東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階　本文編』42–97頁
水ノ江和同・西脇対名夫 2013『季刊　考古学』第125号（特集　縄文文化の境界） 雄山閣
向坂鋼二 1958「土器型式の分布圏」『考古学手帖』2　1–2頁

向坂鋼二 1970「Ⅷ原始時代郷土の生活圏」『郷土史研究講座 1　郷土史研究と考古学』257–299 頁　朝倉書店
森嶋　稔編 1990『円光房遺跡』長野県戸倉町教育委員会
安井俊則・石黒立人ほか 1991『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 21 集　愛知県埋蔵文化財センター
山田康弘 2008a『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』同成社
山田康弘 2008b「貝塚遺跡における墓制」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』シンポジウム I 縄文時代晩期の貝塚と社会 117–132 頁　同大会実行委員会
山田康弘 2015『つくられた縄文時代－日本文化の原像を探る』　新潮社
山田康弘・日下宗一郎・米田　穣 2016「東海地方縄文時代晩期における抜歯習俗の再検討」『日本考古学協会第 82 回総会研究発表要旨』206･207 頁　日本考古学協会
山本暉久 2005「縄文時代階層化社会論の行方」『縄文時代』第 16 号　111–142 頁　縄文時代文化研究会
山本直人 2013『縄文時代の生業と社会』同成社
山本正敏 1991「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」『季刊　考古学』35　55–58 頁　雄山閣
山本正敏 2007「4 石器石製品」『桜町遺跡発掘調査報告書　縄文時代総括編』219–264 頁　小矢部市教育委員会
山本正敏ほか 1990『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編 5 －境 A 遺跡　石器編』富山県教育委員会
渡辺　仁 1990『縄文式階層化社会』六興出版

（中部大学人文学部非常勤講師，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2017 年 3 月 17 日受付，2017 年 7 月 31 日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol. 208 March 2018

Possible Social Dynamics in Central Japan in the Late Jomon Period

OSADA Tomonari

Recent studies on various aspects of the Jomon period have suggested new perspectives. Many have also indicated that the late Jomon society reached a certain degree of complexity. However, most of such studies have focused on Eastern Japan (areas eastward from the Kanto region), paying little attention to Central and Western Japan (areas westward from the Chubu region). Therefore, this paper examines the social dynamics and complexity of Central Japan by using the distribution and consumption of the local specialties of the region as indicators of social complexity.

In Central Japan, the local specialties of each sub-region (e.g. the Tokai sub-region) were traded and consumed locally within the region. Meanwhile, the local specialties of the region, such as obsidian and jadeite, were widely distributed around the Japanese Archipelago. From a modern economic perspective, it is presumed that such prominent products established the social dominance of the region in commerce and trade. There is also evidence implying that products traded and consumed locally within the region, such as large polished stone axes and small stone rods, seem to have enabled their production centers (presumably, the Hokuriku sub-region and the Hida sub-region in Gifu Prefecture) to dominate the commerce of the region and attach unique significance to them. On the other hand, the products distributed beyond regional boundaries, such as obsidian and jadeite, were consumed mainly in the Tohoku and Kanto regions as many have been excavated from these areas. Although they were the staples of the Chubu region, they are likely to have been traded under the control of other regions.

Thus, the distribution and consumption patterns of local specialties increased in complexity and variety in Central Japan in the late Jomon period, behind which the society itself presumably reached a certain degree of complexity. However, the local specialties of the region are likely to have been integrated into the distribution networks/systems established by the Tohoku and Kanto regions. Seemingly, society was not as complex in the Chubu region as it was in the regions that had established their dominance in trade. Otherwise, it is presumed that in Central Japan, society was developing, not independently but dependently or passively, and had not reached the level of complexity in the late Jomon period.

Key words: Late Jomon period, Central Japan, local specialty, distribution, social complexity